

動詞と目的語の間 (II)

小川 明

(平成9年10月2日受理)

On a Variety of Objects (II)

Akira OGAWA

(Received on October 2, 1997)

10. 本稿は『英語英文学研究』3号に発表した「動詞と目的語の間 (I)」に続くものである。そこで述べた事をまとめてみる。動詞と目的語の間の意味の関係は、現実世界の関係が多様であることを反映して、限りなく多様である。意味のみを眺めていたら、それを整理するのはなかなか困難である。しかし少なくとも一つ手がかりがある。それは前置詞である。動詞はさまざまな前置詞を取ることができる。

- (1) a. apologize to X
- b. object to X
- c. look at X
- d. gaze at X

これらの前置詞は動詞と目的語とのあいだの関係を示している。例えば toに続くXは動詞の示す行為の相手であり、atの次のXは注目をする対象である。

もちろん前置詞を取らないものがあるがこれには2種類ある。取っても取らなくてもいい(2)と、全く取らない(3)とがある。

- (2) a. attend (at) X
- b. enter (into) X
- c. escape (from) X
- d. shoot (at) X
- (3) a. discuss X
- b. gratify X
- c. resemble X
- d. thank X

それでは(3)のような全く取らないものについて、手がかりはないのであろうか。実は2つあるのである。それらの動詞が派生名詞形及び形容詞形になった時、前置詞が顕在化する。

- (4) a. discussion on X
- b. gratification to X
- c. resemblance to X
- d. be thankful to X

これらの前置詞を手がかりとして、動詞と目的語の間の関係に接近してみることを試みる。

11. 古い英語においては、現在ほど前置詞は発達はしていなかった。文法関係を示すのに、前置詞の代わりに格がもっと大きな役割を果たしていた。Allen(1995:24-25)によれば、古英語においては主格、対格、与格、属格の4つが生産的に用いられていて、具格はほとんど前置詞が取って代わっていた。動詞の目的語を示すのに対格、与格、属格の3つが使われたが、特定の動詞がどの格を取るかは、予測できない個性があるにしても、その動詞の意味と密接に関連していた。たとえば「他動性(transitivity)」が高い動詞は常に対格を取る。このことは格に代わる役割を継承している前置詞も動詞の意味によってかなりその選択が決定されていたと考えて間違いはないであろう。もっとも近藤(1984: 38)が述べるように、4つの格だけによって格の関係をあらわすのは無理であって、すでに古英語の時代にすでに前置詞がかなり発達していたのであるが、

小西(1976: 28)は次のように言う。

今日の動詞や形容詞の中にはきまった前置詞、at, for, in, of, on, to, withなどをとって、しばしば「自動詞(またはbe+形容詞)+前置詞=他動詞」と考えられるものが少なくない。……これらの動詞や形容詞の多くは、かって属格や与格など斜格の名詞を支配したが、そのような格語尾を代行するものとして、あるいはOEですでに格のもつ多様

な意味を明確にするために添えられた前置詞を温存したりそれからの類推で発達したものと、前置詞付目的語をとるようになったものである。

以上のことを考慮すると、前置詞を手がかりにして、動詞と目的語の関係を調べてみるのは、的外れではないと思う。

12. 小川 (1997 a) では、各々の動詞 (形容詞) の派生名詞形がどの前置詞をとるかが決まっているとすれば、何によって決定されるのかを考察した。そこで得たことは、「意味が類似している動詞 (形容詞) の派生名詞形は同じ前置詞を取る」という原則であった。例えば、「類似・一致」の意味を持つ語はtoを伴う。

- (5) a. approximation to X
- b. conformity to X
- c. resemblance to X
- d. similarity to X
- e. closeness to X

また「結合・出会い」の意味を持つものは、withを伴う。

- (6) a. encounter with X
- b. connection with X
- c. meeting with X
- d. link with X

派生名詞形について述べたことは、動詞そのものが取る前置詞についてもあてはまる。つまり同じような意味を持つ動詞もやはり同じ前置詞を取るのである。例えば「見る」の意味を含む動詞が取る前置詞はatであり、「聞く」という意味を含む動詞は、toを取る。

- (7) gape at, gaze at, glance at, glare at, look at, squint at, stare at

- (8) listen to, hark (at, to), harken (to), hearken (to)

ただしseeとhearはそれぞれatとtoを取らないで他動詞としてのみ使われる。このような多少の不規則性はあるが、ほぼ、この原則で説明できそうである。その不規則性は実は見かけであって意味の違いから説明できる可能性があるのであるが、¹⁾

13. 次の問題は、なぜこのように「類似の意味を持つものは同一の前置詞を取る」という原則が成り立つのかと

うことである。それを説明するためには、前置詞そのものの意味の解明にむかう必要がある。例えばtoの基本的な意味はgo toのtoの意味すなわち近付いて行く対象を表わす。そうすればapproachがtoを取るのは空間における接近を表わすからであり、resemblanceやsimilarがtoを取るのは、性質において接近しているからである。つまり比喩的に用いられている。またwithの基本的な意味は、「一緒」であるので「結合」の意味を持つ語と結びつくのである。

それゆえ、まず個々の前置詞がどんな動詞と結びつくのか調べて表にしてみる。ただし完璧というわけではない。()内は任意の前置詞を示し、意味が類似しているものをまとめてある。右側に派生名詞形も併記する。

about		
	ramble about	
	argue (about)	argument about
	debate (about)	debate about
	dispute (about)	dispute about
	discuss	discussion about

against		
	rub (against)	
	attack	attack against
	battle against	battle against
	fight (against)	fight against
	offend against	offense against
	war against	war against

at		
	aim at	aim at
	attempt	attempt at
	attend (at)	attendance at
	chew (at)	chew at
	clutch (at)	clutch at
	kick (at)	kick at
	shoot (at)	shot at

by		
	pass (by)	

動詞と目的語の間(Ⅱ)

	abide by			escape (from)	escape from
	stick by			flee (from)	flight from
	stand by			graduate (from)	graduation from
for				refrain from	
				retreat from	retreat from
	admire	admiration for		shrink from	
	adore	adoration for		slip (from)	
	esteem	esteem for			
	regard	regard for		benefit from	benefit from
	respect	respect for		date from	
	revere	reverence for		differ from	difference from
	venerate	veneration for		diverge from	divergence from
	dislike	dislike for	in		
	scorn	scorn for		delight in	delight in
				exult in	
	aim for	aim for		rejoice in	
	apply for	application for			
	ask for		into		
	beg for			enter (into)	entrance into
	desire	desire for		delve into	
	hope for	hope for		dig into	
	hunt for	hunt for		penetrate(into)	penetration into
	wish for	wish for		permeate (into)	
	yearn fo	yearning for		pierce into	
	look for			examine	examination into
	request	request for		explore	exploration into
	need	need for		inquire	inquire into
				investigate (into)	investigation into
	regret	regret for		probe (into)	probe into
	repent	repentance for		research	research into
	send for		on		
	wait for			assault (on)	assault on
				attack	attack on
				encroach on	encroachment on
from				impinge on	
	alight from			infringe on	
	depart (from)	departure from		intrude on	intrusion on
	descend from	descent from		pounce on	pounce upon
	desist from			raid (on)	raid on
	dismount from				

attend on	attendance on	round	
		turn (round)	
bet on	bet on		
gamble on	gamble on	through	
		permeate (through)	
count on		pierce (through)	
depend on	dependence on		
hinge on		to	
rely on	reliance on	approach (to)	approach to
		accompany	accompaniment to
concentrate on	concentration on		
focus on	focus on	add to	addition to
		adhere to	adhesion to
deliberate (on)	deliberation on	attach to	attachment to
dwell on			
meditate (on)		resemble	resemblance to
muse on		be close to	closeness to
ponder on		be equal to	equality to
reflect on	reflection on	be similar to	similarity to
		be like	likeness to
comment on	comment on		
lecture on	lecture on	apologize to	apology to
remark on	remark on	consent to	consent to
		gratify	gratification to
embark on	embarkation on	greet	greeting to
		obey	obedience to
decide on	decision on	reply to	reply to
		respond to	response to
over		thank	thanks to
jump (over)	jump over	warn	warning to
control	control over	aid	aid to
rule over	rule over	assist	assistance to
		help	help to
brood over			
muse over		contradict	contradiction to
ponder (over)		object to	objection to
		oppose	opposition to
clash over	clash over		
fuss over	fuss over	hinder	hindrance to
quarrel over	quarrel over	obstruct	obstruction to
wrangle over	wrangle over		

afflict	affliction to
damage	damage to
harm	harm to
hurt	hurt to
injure	injury to
annoy	annoyance to
embarrass	embarrassment to
harass	harassment to
offend	offense to
surprise	surprise to
threaten	threat to
toward	
incline toward	inclination toward
lean toward	leaning toward
tend toward	tendency toward
with	
collide with	collision with
marry	marriage with
meet (with)	meeting with
ally with	alliance with
associate with	association with
collocate with	collocation with
combine with	combination with
connect with	connection with
link with	link with
coexist with	coexistence with
battle with	battle with
war with	war with
accord with	accordance with
agree with	agreement with
coincidence with	coincidence with
correspond with	correspondence with
harmonize with	harmony with
sympathize with	sympathy with

match (with) match with
 suit (with) suit with

14. これらの表をもとに観察をしてみよう。全体的に言えることは、個々の前置詞について、基本的には、空間を示す意味が土台に有り、それがだんだん比喩的な意味に転じて行くということが見られる。例えばagainstはrubとの結びつきにおいては、物理的にこする物体であるがfightでは戦う相手である。toは、go toに見られるように接近していく場所であるが、抽象的にresemblance, similarでは、類似の相手をtoは示す。これは前者では空間での接近であるが、後者で性質においての近似を示す意味に多分拡張されたのであろう。withについても、meet with, collide with, coexist withについては、空間において一緒になる具体的なものを示すが、match with, fit withでは、そうではない。

このことは、場所理論によって、既に説明されていることである。池上(1981)からその理論のエッセンスをよく表わしていると思われる箇所を引用してみる。池上(1981: 11-12)は基本的な考えを示すものとして、F. Wüllner, *Die Bedeutung der sprachlichen Casus und Modi* および J.A.Hartung, *Ueber die Casus, ihre Bildung und Bedeutung in der griechischen und lateinischen Sprache* からそれぞれ次の箇所を抜き出している。

すべての思考、言語行為は知覚に由来し、知覚に依存する。ところで知覚は空間と時間に関連するものであり、これら二つのものについての知覚、ならびにそれらについて可能な諸関係が、事実上あらゆる知覚行為において、その形式として機能するのである。

われわれの知覚は、一部には感覚、一部には精神を通じて行なわれるものである。どの場合でも先行するのは感覚的な知覚であり、従って言語もまた精神的な知覚より先に感覚的な知覚を利用する。感覚的なものと精神的なものとの間には類推関係が存在しており、それに基づいて語は精神的な感覚を表わすべく転用されるのである。

そして場所論者は、その適用対象としてもっぱら関心を

持っていたのは格（および前置詞）であった。
もうひとつ小西(1976: 60)から引用する。

多くの古くからある前置詞は原義的には場所規定をあらわし、この視覚的、即物的な段階から、その用法が拡大され、さまざまな比喩的、抽象的關係の表現へ転用されていったのである。

また認知言語学においても同様の指摘がなされているが、前置詞に限らず言語表現全体を視野に収めている。山梨(1995: 49)より引用する。

われわれは空間の中に身をおいて生活しており、空間にかかわるさまざまな情報が、日常生活の経験的な基盤の背景として機能している。また、この空間にかかわる情報、空間との相互作用を通して得られる知識は、時間の概念をはじめとする日常言語のさまざまな意味領域を比喩的に特徴づける背景になっている。

ここで少しでも新しく言えることがあるとすれば、動詞と結びつく前置詞についても即物的な用法と比喩的な用法のどちらも持っているのだということである。つまり一つの前置詞が空間的な具体的な意味をもつ動詞と同時に抽象的な意味を持つ動詞とも結びつくのである。もう一度たくさんの動詞と結びつくtoに戻って観察してみよう。「接近していく目標」がその基本的な空間的表現であり、それに近い比喩的な意味が「類似の相手」である。これは空間ではないが、性質において接近しているからである。また「接近していく目標」から、その方向性が出てくる。それゆえ行為が向かって行く相手つまり「行為の相手」を示すことになる。さらに「影響を受ける対象」もその延長上にあるであろう。このtoの持つ方向性はwithと比較してみると明らかになる。withは基本的には、物と物が一緒になることである。ここからは方向性は出てこない。動詞を比較してみると、よく分かる。toを取る動詞は作用が主語から目的語に一方的になされるのに対して、withを取る動詞は主語の方からの一方的な働きかけではなくて目的語の方からも主語にたいして働きかけがある。動詞の示す行為をする時、主語と目的語のどちらもが参加をする。これはmarryやmeetという動詞において如実に現われる。

さてforについては空間の意味が基本にあるのであろうか。たしかにstart for, leave forなどにおいては空間表現で使われるのであるが、ほとんどは願望、希求、必要、尊敬などの対象である。つまり追求する目標である。これと空間の意味とが関連するのかどうかについてはもう少し検討が必要である。

15. 目的語の意味的な性質の観点から見たらどうであろうか。Hopper and Thompson (1980)は他動性に関する研究であるが、そこでは他動的事態全体が問題になっている。Lakoff(1977)も同様に事態全体を考えている。もちろん目的語の性質もその一部に含まれている。しかしここでは目的語のみに注目して、もうすこしくわしく調べてみよう。山梨(1995: 239-241)及び河上(1996: 117-125)を参考にして目的語の種類を分けてみよう。

(A)動詞の示す行為により、目的語の状態変化がひき起こされるもの。

- (9) a. John broke the window.
b. Mary melted the ice.

(B)目的語が動詞の示す行為により創造されるもの。

- (10) a. John built a house.
b. Mary dug a hole in the garden.

(C)目的語が動詞の行為により位置変化が引き起こされるものを示す。

- (11) a. John drove the car.
b. Mary opened the door.

(D)目的語が行為の対象の物体を示している。

- (12) a. The man clasped her hand.
b. Somebody touched my shoulder.

(E)目的語が注意や意識の向けられる対象である。

- (13) a. John saw a strange man.
b. John heard the news.

という具合に列挙して行くことができるであろう。

(A)がプロトタイプと考えられている。しかしうまくしらみつぶしに分類できるのであろうか。例えばbuy, rent, memorize, remember, get, lose, surround, coverと動詞を次々とあげて行った場合、その目的語をきれいに有限のグループに分けることができるのかと言う疑問が残る。けれどここでは(A)~(E)を基にして考えてみることにする。

既に表にした前置詞を取る動詞をざっと眺めてみると、プロトタイプと見做されている、目的語に状態変化を引

き起こす動詞がほとんどないことに気づく。つまり目的語に状態変化を引き起こすような行為を示す動詞は前置詞を取らない傾向があるということになる。このことはTaylor(1989: 211)の指摘に一致する。次のペアにおいて前置詞のない構文のほうが、あるものより、動詞の示す行為が目的語の示す対象に対して及ぼす影響が強い。

- (14) a. He swam across the Channel.
 b. He swam the Channel.
 (15) a. He regularly flies across the Atlantic.
 b. He regularly flies the Atlantic.

またQuirk et al. (1972: 322)が指摘するように、前置詞がない時は行為の達成を示すが、ある時は必ずしも達成は示さない。

- (16) a. *He shot the Commander-in-Chief, but missed him.
 b. He shot at the Commander-in-Chief, but missed him.

小西(1976: 28-29)でも多くの動詞について、前置詞を取る場合ととらない場合とが平行して存在しており、そこに意味の分化が見られ、前置詞がないほうが動詞の目的語に及ぼす影響が、普通直接的であることが述べられている。

上の目的語の分類で言えば、対象がなんらかの変化を起こすプロトタイプの(A)とそれに近い(B)と(C)の場合は、前置詞が生じにくい。それに対して(D)と(E)のように変化を起こさないもの場合は、意味が似ている動詞のなかには、前置詞を伴うことができるものが存在する。grasp(at), hold(to), touch(on), look at, listen toなどがそうである。

16. このことと関連して、動詞の派生名詞について考えてみる。派生名詞が伴う前置詞は圧倒的にofが多いのであるが、その他の前置詞を取るものが存在する。もともと後者のなかには、動詞そのものが、それに対応する前置詞を伴うことが多いのであるが、全く伴わない場合がある。例えば、

- (17) a. resemble resemblance to
 b. attack attack on
 c. discuss discussion about
 d. gratify gratification to

これらofを取らない動詞の目的語は (A)のプロトタイプから比較的遠いものではないか。つまりプロトタイプ

に近いものほどofを取るのではないか。次の動詞と比較してみると明らかである。

- (18) a. destroy destruction of (A)
 b. construct construction of (B)
 c. create creation of (B)
 d. transport transportation of (C)
 e. import import of (C)

それでは似ている意味を持つ動詞の派生名詞が取る前置詞について、of対その他の前置詞でどのような差が生じるのかを観察してみよう。

- (19) a. invade invasion of
 b. enter entrance into
 c. encroach on encroachment on
 d. intrude{into, on} intrusion{into, on}
 e. trespass on trespass on

ofを取るものは対象に影響を起こすものではないか。invadeはenterと異なり、ただ入るだけではなくて、相手に影響を及ぼすのである。これはLongman Dictionary of Contemporary Englishの定義 to go or come into and attack, so as to take control of を見れば明らかである。それに対してenterの対象は影響を受けるのではなく、ただ場所を示すだけである。trespass=enter privately owned property or land without permissionもintrude=enter unwanted or unasked もその定義から明らかのように、目的語はどちらかと言うと場所を示している。enterの前置詞がintoであるのに対して、trespassがonであるのは、前者が「入りこむ」のに対して後者が「踏みつける」ということを示す。intrudeがintoとonの両方とるのは、どちらの見方もできることを意味するのであろう。

もう一つ見てみる。

- (20) a. damage damage to
 b. harm harm to
 c. injure injury to
 d. destroy destruction of
 e. devastate devastation of
 f. impair impairment of

damageとdestroyの関係も同じように考えることができるであろう。「破壊する」ほうが「傷つける」より相手に与えるインパクトは大きいのである。

以上のことは、前置詞が基本的に場所を示すことと関係するように思われる。場所というのそこへ向かったり、

離れたり、入ったり、出たり、乗ったり、降りたりするものであって、元来、行為による影響を受けるものではないからである。既に述べたように、前置詞の持つ抽象的な意味の場合も場所的な意味から出てきたものであるから、同じことが言えるであろう。

17. 今まで、全体的に眺めてきたのであるが、個別の前置詞について、調べてみよう。前置詞によって表わされる概念(関係)の中には編入されにくいものとしやすいものがありそうである。例えばatやfromが示す概念は編入されにくい。atやfromについては、それを伴ってもそうでなくても良い動詞は少ないように思われる。すぐ思い付くのは、attend(at), clutch(at)であり、escape (from), flee (from)のような少数の例である。圧倒的にatやfromが頭在化する例が多いように思われる。たとえば glance at, look at, gaze atのように、それに対してtoやforはとても編入しやすい。

この観点から意味上反対になるペアであるfromとtoを比較してみたい。表から明らかなように、toに対してfromはとても編入しにくいのであるが、実はこのことは他の現象においても観察されるのである。give, tell, lend, send, show, write, read, hand, pay, promise, wish, denyなどはtoを取ってもよいし取らなくてもよい。toを用いないで表わすことができる。

- (21) a. She read it to her children.
 b. She read them the story.
 (22) a. They paid it to the old man.
 b. They paid him the money.

一方fromを取る beg, inherit, borrow, obtain, elicit, receive はfromを用いない表現は不可である。

- (23) a. You can borrow these books from the man.
 b. *You can borrow the man these books.
 (24) a. I received a letter from the girl.
 b. *I received the girl a letter.

またさまざまな所で指摘されているように、toを表現しないで、その意味を表わすことができるが、fromは省略することができない(cf.(太田:1996))。まずtoが表現されないにも拘らず、着点の意味が表わされている例をあげる。

- (25) a. The bottle floated under the bridge.
 b. The bush was the only conceivable

hiding-place, so I dashed behind it.

(Quirk et al. (1972: 312))

- c. When it started to rain, we all went underneath the trees. (ibid.)

次にtoがあってもなくても任意である例をあげる。

- (26) a. John loaded hay on(to) the wagon.
 b. Mary tossed the garbage on(to) the floor.
 c. Walk in(to) the room.
 d. Jump in(to) the lake.

それに対してfromは必ず表現されなければならない。

- (27) a. from under the table
 b. from behind the tree

ただしいくつか当てはまらない例がある。from~toの時は、toが省略できない。

- (28) The ball bounced from behind the table to under the table.

逆にfromが省略できる場合がある。

- (29) We camped there (from) June through September. (Quirk et al. (1972: 318))

池上(1981)は起点と到達点が非対称であるということ論じている。この二つは論理的には、完全に対等であるが、言語に現われている限りでは、到達点が無標識的なものとして扱われるのに対して、起点は有標識な項として普通扱われる。例えば、現代英語では、本来存在点を表わすhereとthereが到達点を表わしていたhitherとthitherに取って代わった。一方起点はhence, thenceという形からfrom here, from thereという形を用いるようになった。結果的には、到達点の表示はゼロによってなされているように見える。またThe wind blows south.はもともと「南から風が吹く」という起点を示していたが、現在では普通「南へ風が吹く」という意味である。

このことと関連していると思われることは、起点を示す前置詞はfromしかないのに対して、向かって行くことを示す前置詞は何種類かあることである。against, at, onto, into, toなどがある。そして向かっていく仕方に関して異なった意味を持っている。例えば、atは目掛けて行く対象を示し、toは着点である対象を示す。それゆえ、同じ動詞でもatを取るか、toを取るかで意味が異なってくる。

- (30) a. He ran at me.
 b. He ran to me.

(Quirk et al. (1972: 322))

また roar, bellow, shout, mutter, growl が at を取ると標的を示し, to を取ると何かを相手に伝達していることを示す (cf. Quirk et al. (1972: 322)).

18. 以下は次稿で論じる予定である。

注

1. see と hear が look at と listen to と対立して前置詞 at と to を取らないのは, 根拠があるように思われる。よく言われるように see と hear は受身であって, 「目に入って来る」「耳に聞こえて来る」という意味を持つ。それに対して look at と listen to では, 主体は対象に対して能動的である。この意味上の差が at と to を取るか取らないかを決めているように思われる。at は aim at や shoot at が示すように目掛けていく標的を, to は approach to や reply to が示すように目指していく対象や行為を向ける対象・方向を表わす。それゆえどちらの前置詞も自然に能動的な行為と結びつく。このことから see と hear は at と to を取らないのではないか。

「見る」という意味を持つ動詞は, (7) の例が示すように at を取る。これは視線が弾丸のように標的に向かって飛んでいくというふうにつまえているからであろう。それに対して「聞く」という意味を持つ動詞は (8) の例から明らかなように to を取る。これは, そちらの方向に注意を向けるとつまえていると考えることができる。日本語でも「耳を傾ける」という表現があり, この点では, 日本語もやはり同じような捉え方をしていると思われる。

参考文献

- Allen, Cynthia L. (1995) *Case Marking and Reanalysis*. Oxford: Clarendon Press.
- Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," *Language* 56, 251-299.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館。
- 河上誓作 編 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社。
- 近藤健二 (1984) 『英語前置詞構文の起源』松柏社。
- 小西友七 (1976) 『英語の前置詞』大修館。
- Lakoff, George (1977) "Linguistic Gestalts," *CLS* 13, 236-287.
- 小川 明 (1997a) 「意味から見た派生名詞の前置詞」『東京家政大学研究紀要』37, 223-228.
- 小川 明 (1997b) 「動詞と目的語の間(I)」『英語文学研究』3, 77-92.
- 太田 朗 (1996) 「動詞の意味と統語構造」*Studies in English Linguistics & Literature* 12, 1-33.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Taylor, John (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房。